

令和7年6月12日

各区長・集落組合長 様

富士見町長 名取 重治
(公 印 省 略)

特定外来生物（アレチウリ・オオハングンソウ等）駆除のご協力について

平素は、町環境行政にご理解とご協力を頂き、厚く御礼申しあげます。

さて、町内では特定外来生物（アレチウリ・オオハングンソウ等）が広範囲で確認されています。町では、各区・団体、町環境衛生自治会連合会と協力しながら、河川を中心に抜き取り駆除を行っておりますが、未だ絶滅に至っておりません。

このような状況をふまえ、貴区・集落組合におかれましても、駆除のご協力をお願いいたします。

ご協力をいただける区等におかれましては、下記のとおり対応させていただきますので、ご協力をお願いいたします。

記

- 1 実施時期 7月～8月
- 2 駆除方法 抜き取り、または結実前の刈り取り後、
町の指定袋にて収集してください。
- 3 回収場所 指定袋に入れて公民館の庭先に置いてください。
後日、環境係で回収します。
- 4 その他 ご協力いただける場合は、実施日を係までご連絡ください。
指定袋を直近の文書配布でお渡しいたします。

【連絡先】

建設課 環境係

係長：植松 担当：山浦

電話 62-9114（直通）

諏訪湖および諏訪湖流域河川周辺の

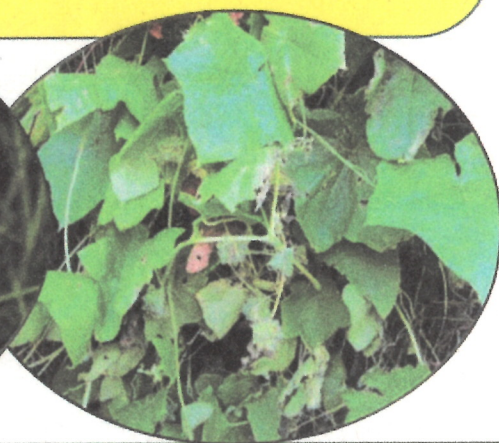
在来植物や生態系を脅かす、特に問題な外来植物

Wanted!! 特定外来生物!

オオハンゴンソウ

オオキンケイギク

アレチウリ



特定外来生物とは

外来生物（海外起源の外来種）であつて、生態系、人の生命・身体、農林水産業へ被害を及ぼすもの、又は及ぼすおそれがあるものの中から「**外来生物法**」によって指定されます。

特定外来植物は生きているものに限られ、個体だけではなく、卵、種子、器官なども含まれます。

許可のない飼育、栽培、保管、運搬等は原則禁止されています。

「**外来生物法**（特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律）H17年施行、H28年改正」は、日本の生態系や農林水産業、人の生命や身体への被害を防ぐことを目的に、こうした被害を及ぼす外来生物の飼養等を規制し、また防除等を推進するためのものです。

被害予防 三原則!

1. 入れない~

悪影響を及ぼすかもしれない外来生物をおやみに日本に入れない

2. 捨てない~

栽培・飼育している外来生物を野外に捨てない

3. 拡げない~

すでに野外で生育・生息している外来生物は他地域に拡げない

駆除は繰り返し実施!

罰則: 販売・頒布目的での飼養、不正な飼養、許可のない輸入、許可を受けていない者への販売・頒布、野外へ放つなどの行為に対しては、個人には3年以下の懲役や300万円以下の罰金、法人には1億円以下の罰金が科されます。

駆除後の処理: 枯死させてからビニール袋に入れ、燃やすゴミとして処分してください。生きたまま移動して根付かせたり、種子が拡散しないように注意してください。ご不明な点等がございましたら、お住まいの市町村にお問い合わせください。

アレチウリ

科 名：ウリ科
学 名：*Sicyos angulatus*
原産地域：北アメリカ

【どんな被害を引き起こすのか】

生態系：在来植物の駆逐・生物多様性の低下

- ・つるを伸ばして他の植物を覆い、日光を遮って駆逐する
- ・河川敷に固有の在来植物の減少を招く（千曲川や犀川では在来植物の種数が減少）

産 業：農作物への被害

- ・畑地の農作物を覆い、収量低下を招く

【生育場所】

- ・河川敷、林縁、畑地、樹園地、路傍等
- ・日当たりの良い肥沃地を好む

つる性の1年生草本



茎は粗い毛を密生したつるで、巻きひげで他物に巻き付き広がる



花

**

果実



- ・花期は8～10月
- ・花の径は約1cmで黄白色
- ・葉の脇に雄花序と雌花序を1本ずつつける



- ・葉は径10～20cm
- ・3～7浅裂
- ・葉柄は葉より長く、互生

- ・9月下旬には果実が熟し始める
- ・直径3cm程度のコンペイトウ型の集合果ができる
- ・1つの果実は、長さ約1cmの楕円形
- ・鋭いトゲを密生し、中に1個の種子が入っている

【どこまで広がっているか】

長野県では

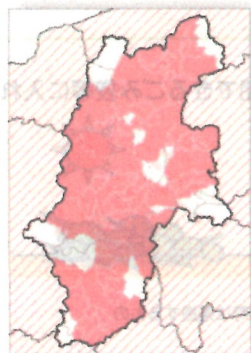
- ・県内に広く野生化

全国では

- ・1952年に静岡県清水港で確認
- ・輸入大豆や輸入飼料等に混入して持ち込まれたといわれている
- ・ほぼ全国に野生化

世界の分布

- ・南アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ、アジア、オセアニア（温帯～熱帯域）

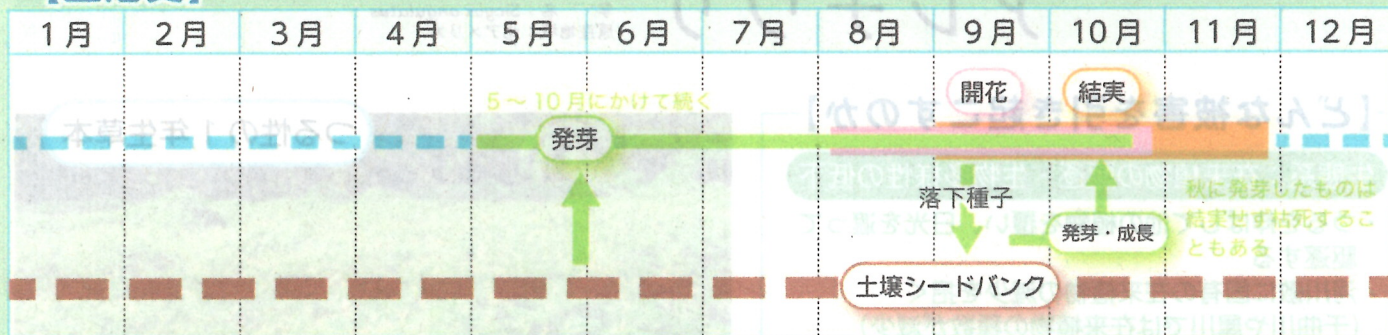


2019年現在
定着 一部地域に定着

【特性】

- ・冬になると枯死するが、つるは丈夫で枯れても絡み合ったまま残る
- ・成長は早く、つるは長さ数mから十数mに達し、周囲の植物を覆うように繁茂する
- ・大量の種子を生産し、早い時期に発生した個体では5,000個以上の種子をつけることが報告されている
- ・種子は、光等の発芽条件が満たされれば発芽する
- ・発芽条件が満たされず発芽できなかった種子は埋土種子となり、土壌シードバンクを形成する
- ・芽生えは5月頃から10月頃までの長期にわたる
- ・種子には休眠性があり、土壌に埋まっても発芽能力を維持する
- ・当年産の種子は休眠性が高く発芽しないものが多いが、1～2年経過した種子は発芽率が高くなり、3年以上経つと発芽率が低下するといわれている
- ・土壌シードバンクは表層0.25m程度に集中するとされる
- ・種子は軽く、水に浮くため、水系を通じて分布拡大する

【生活史】



【防除方法】

作戦を立てる！

1年草のアレチウリは、種子を作らせないことが重要です。現場の状況、作業人数、使用できる道具によって、選択できる防除方法は異なります。どのような防除に取り組むか、まずは作戦を立てましょう。

作業を見直す！

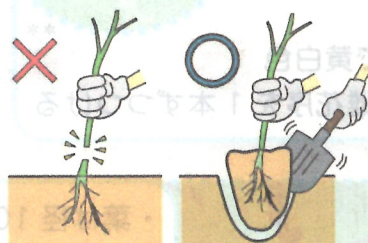
防除効果を実感できないときこそ、作業の見直しが重要です。記録した実施内容や経過の観察から減らない要因を考え、実施時期を早める、作業回数を増やす、他からの種子の流入を防ぐなど、作業を効果的にする方策を探りましょう。

抜き取り 根絶を目指す

1年草のため根が浅く、根を残さないよう抜き取れば、確実に駆除できる

- スコップや根掘り等を用いて、根ごと抜き取る
- 成長すると長いつるを伸ばして抜き取りにくくなるため、実施は芽生え期から成長初期がよい
- 年3回以上(①6月下旬、②7月下旬～8月上旬、③9月下旬等)、継続して実施する

※アレチウリのみを対象とするため、他の植物への影響が小さい
※葉や茎には毛が、果実にはトゲがあるため、作業には革手袋等を着用する

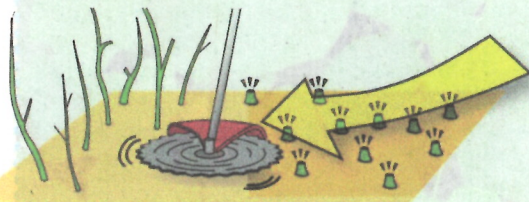


芽生え
(芽生えは手で簡単に抜くことができる)

刈り払い 抑える・増やさない

広範囲を防除したい場合に適している

- 刈払機等で地上部を全面的に刈り取る作業は、抜き取りに比べると軽微であり、開花結実を抑制し、土壌への種子供給を減らす効果がある
 - 年3回以上(結実期前半の9月上旬頃まで)、継続して実施する
- ※貴重な植物等が生育する場合は刈り残す等の注意が必要
※葉や茎には毛が、果実にはトゲがあるため、作業には革手袋等を着用する



生育初期に抜き取りを実施し、その後は刈り取りを継続

先に刈り取りを行い、その後出てきた芽生えを抜き取る等、現状に合わせて作業を組み合わせ、種子を作る時期まで観察を継続する

きっちりと処分する ～作業後～

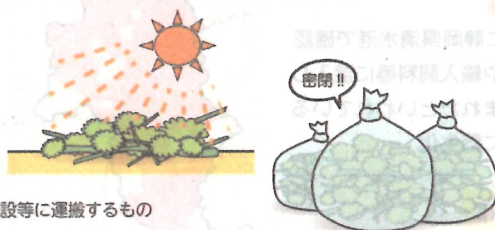
- 刈り取ったアレチウリは、花や果実が飛び散らないよう密閉できるゴミ袋等に入れて枯らす(花や果実がなければ野積みして枯らしてもよい)

- それぞれの自治体のごみ処理方法に従って焼却処分する

※特定外来生物に指定されたものは、原則として「飼育、栽培、保管及び運搬すること」、「輸入すること」、「野外へ放つ、植えるまたはまくこと」、「譲渡、引き渡し、販売すること」が禁止されている

※なお、以下のすべてに該当する場合は、運搬・保管が可能

- ・防除した特定外来生物である植物を処分することを目的として、ごみの焼却施設等に運搬するもの
- ・落下や種子の飛散等の逸出防止措置が運搬中にとられているもの
- ・特定外来生物の防除である旨、実施する主体、実施する日及び場所等を事前に告知する等、公表された活動に伴って運搬するものであること
- ・保管中の逸出防止措置がとられており、第三者が容易に持ち出すことができないよう実施する主体において管理され、かつ必要最低限の期間に限り行う場合



オオハンゴンソウ

科 名：キク科
学 名：Rudbeckia laciniata
原産地域：北アメリカ

【どんな被害を引き起こすのか】

生態系：在来植物の駆逐

- ・ 湿原や自然公園内の在来植物と競合、駆逐
- ・ 繁殖力が旺盛であり、大きな群落を形成
- ・ 高さ 3m に達する大型の草本類であり、他の植物への光を遮り、生育を阻害する

【生育場所】

- ・ 路傍、河原、湿原、道路端や線路の沿線等
- ・ しばしば河川敷等の湿った場所に大群落をつくる

【どこまで広がっているか】

長野県では

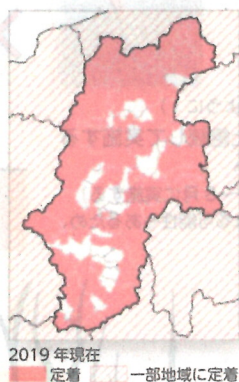
- ・ ほとんどの市町村に分布

全国では

- ・ 明治中期に北米から観賞用の園芸植物として持ち込まれた
- ・ 現在は、ほぼ全国に分布（中部地方以北の寒冷な地域に多い）

世界の分布

- ・ 世界各地に分布（主に温帯域）



舌状花

筒状花

- ・ 高さ 0.5m から 3m 程度になる多年生草本
- ・ 下部の葉は長い柄があり、5～7 深裂し、裂片に粗い鋸歯がある



- ・ 開花は 7～10 月頃
- ・ 長い花柄の先に直径 6～10cm の黄色の頭花をつける
- ・ 舌状花は黄色で 6～14 個、中央の筒状花は黄緑色

- ・ 結実は、開花後の夏～秋
- ・ 果実はやや扁平で 4～5mm
- ・ 突起状の冠毛がある



春季の芽生え



初夏の葉

【間違わないで！】主な類似植物（外来種）

アラゲハンゴンソウ(キク科)



- ・ 開花は 7～10 月
- ・ 花の直径は 6～10cm
- ・ 舌状花は黄色～橙黄色で 12～20 個、筒状花は紫黒色（品種によっては緑色もある）
- ・ 葉は分裂しない

キクイモ(キク科)

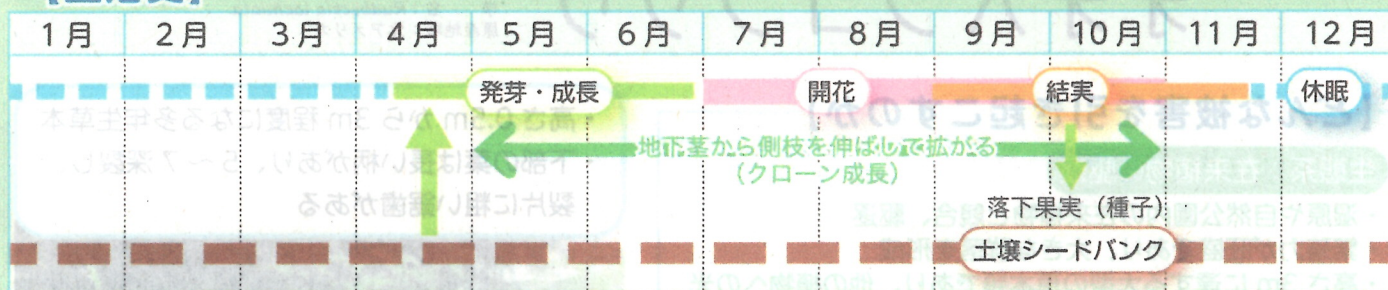


- ・ 開花は 8～11 月
- ・ 花の直径は 5～10cm
- ・ 舌状花は黄色で 10～20 個、筒状花は黄色
- ・ 葉は分裂しない

【特性】

- ・ 耐寒性が強く、ブナ帯や亜高山帯の湿原や林床にも侵入する
- ・ 種子の生産量が多く、1 株あたり 1,600 個の種子ができるといわれている
- ・ 種子は休眠性があり、土壌に埋まっても発芽能力を維持するため、土壌シードバンクを形成する
- ・ 埋土種子は 3 年間は発芽能力があるといわれている
- ・ 種子のほか、地下茎から側枝を伸ばして広がる（クローン成長）
- ・ 根茎の一部からでも地上部を再生する能力がある

【生活史】



【防除方法】

作戦を立てる！

根茎からでも増えるオオハングソンは、根を残さないこと、種子を作らせないことが重要です。現場の状況、作業人数、使用できる道具によって、選択できる防除方法は異なります。どのような防除に取り組むか、まずは作戦を立てましょう。

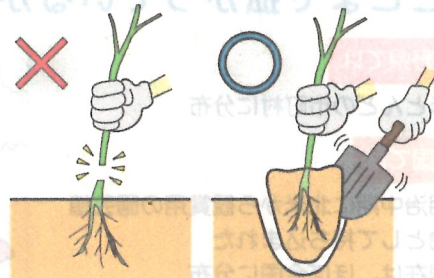
作業を見直す！

防除効果を実感できないときこそ、作業の見直しが重要です。記録した実施内容や経過の観察から減らない要因を考え、防除方法を組み合わせる、道具を使う、作業回数を増やすなど、作業を効果的にする方策を探りましょう。

抜き取り 根絶を目指す

- 種子のほか根茎でも拡がり、根茎の一部分でも残っていればそこから再生するため、根ごとしっかりと抜き取る
- スコップや根掘り等を用いて根ごと抜き取る(できるだけ根を残さないように！)
- 年1回以上(種子を散布する結実期が始まる前の4～8月頃)、3年間以上継続して実施する
 - ※大きく成長していると抜き取りにくくなるため、5～6月頃が実施しやすい(ただし、花のない状態で識別が難しい場合は、識別しやすい開花時期の7～8月に実施する)
 - ※土壌中には大量の種子が存在する可能性があり、また周囲から種子が供給される可能性もあるため、毎年継続して実施していくことが必要

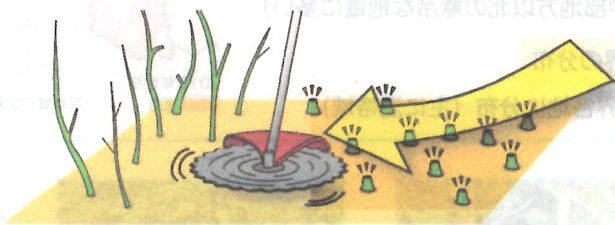
根掘り



刈り払い 抑える

広範囲を防除したい場合に適している

- 多年生草本であり根は太く、人力で抜き取る作業は大変
- 刈払機等による刈り払いは抜き取りに比べると作業は軽微であり、種子をつける前に実施すれば、種子による繁殖を抑える効果がある(ただし、残った地下茎から再生するため、継続した実施が必要)
- 年に1回以上(種子を散布する結実期までの4～8月頃まで)、3年間以上継続して実施する
 - ※1回の刈り取り程度では、切株からたくさんの萌芽が発生し、樹勢が旺盛になることもあるため、継続した実施が必要



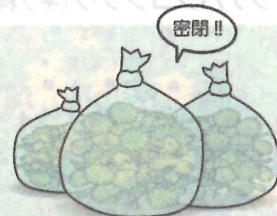
刈り払い+抜き取り 抑える・根絶する

刈り払いと抜き取りを組み合わせ効率化をはかる

- 刈払機によりオオハングソンを刈り払い、草丈が低くなったオオハングソンを抜き取る
- 刈り払いは7月と8月に実施し、刈り払い後の7月と8月と9月に抜き取り作業を実施
 - ※刈り払いによって、オオハングソンが見つ付けやすくなり、草丈が低い状態での抜き取りや搬出作業もしやすく、作業効率が上昇する
 - ※ただし、刈り払い後の草丈の低い状態のオオハングソンを識別できることが必要

きっちりと処分する ～作業後～

- 抜き取ったまたは刈り払ったオオハングソンは、密閉できるごみ袋等に入れて枯らす
- それぞれの自治体のゴミ処理方法に従って焼却処分する
 - ※特定外来生物に指定されたものは、原則として「飼育、栽培、保管及び運搬すること」、「輸入すること」、「野外へ放つ、植えるまたはまくこと」、「譲渡、引き渡し、販売すること」が禁止されている
 - ※なお、以下のすべてに該当する場合は、運搬・保管が可能
 - ・防除した特定外来生物である植物を処分することを目的として、ごみの焼却施設等に運搬するもの
 - ・落下や種子の飛散等の逸出防止措置が運搬中にとられているもの
 - ・特定外来生物の防除である旨、実施する主体、実施する日及び場所等を事前に告知する等、公表された活動に伴って運搬するもの
 - ・保管中の逸出防止措置がとられており、第三者が容易に持ち出すことができないよう実施する主体において管理され、かつ必要最低限の期間に限り行う場合



拡げない ～新たに植えない・残さない～

- オオハングソンは黄色で目立つ花をつける
- 花がきれいだからといって、野外に生育する株や種子を持ち帰って自宅に植えることは絶対にしない
- 清掃活動等で草刈りを行う際には、残さずにしっかりと刈り取る

オオキンケイギク

科 名：キク科
学 名：Coreopsis lanceolata
原産地域：北アメリカ

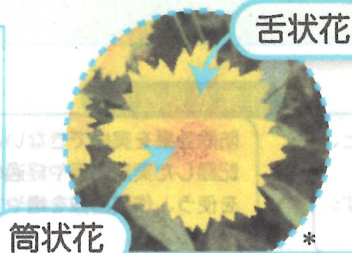
【どんな被害を引き起こすのか】

生態系：在来植物の駆逐

- ・繁殖力が旺盛であり、大きな群落を形成
- ・他の植物に届く光を遮り、生育を阻害して他の植物種を駆逐する
- ・河川敷に固有の在来植物の減少を招く

【生育場所】

- ・河川敷、道路沿い等の日当たりの良い場所
- ・しばしば大群落をつくる



筒状花

舌状花

- ・5～7月頃、直径5～7cmのオレンジ色の花を咲かせる
- ・舌状花と筒状花はともに橙黄色、花冠の先は4～5裂する

高さ0.3～0.7mになる多年生草本



- ・茎は根元から束状に多数生育
- ・根元につく根生葉は3～5枚の小葉に分裂し、花時にも残る
- ・茎につく葉は対生または互生
- ・茎や葉は無毛又は開出毛がある
- ・夏～秋に結実
- ・果実は扁平な楕円形で黒く、翼(よく)がある

【どこまで広がっているか】

長野県では

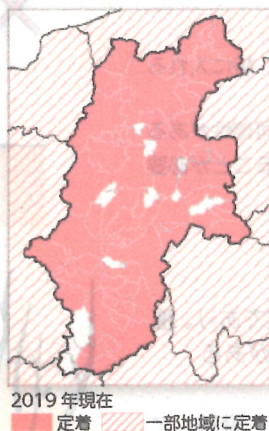
- ・全県的に分布

全国では

- ・明治中期に北米から観賞用や緑化植物として持ち込まれた
- ・現在は、ほぼ全国で野生化

世界の分布

- ・台湾、オーストラリア、ニュージーランド、サウジアラビア、南米等(温帯域)



←細長いへら状の葉

葉のふちはなめらか

点在するロゼット
(3月)→

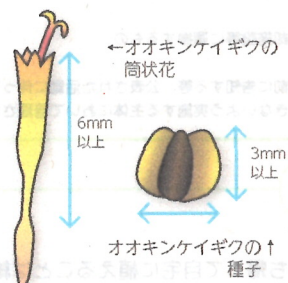


【間違わないで！主な類似植物】

ホソバハルシャギク(キク科)(外来種)

オオキンケイギクとよく似たホソバハルシャギクは、特定外来生物ではありません。葉のつき方で見分けられるとされていますが、実際には難しいようで、花と種子のサイズが有効な区別点とされています*。

花の中心部の筒状花の花冠長がオオキンケイギクは6mm以上、ホソバハルシャギクは4.5mm以下と小さいこと、種子のサイズ(長さまたは幅)がオオキンケイギクではふつう3mm以上あるのに対し、ホソバハルシャギクでは3mm以下と一回り小さい



*富山県中央植物園だより No.91 (2019年4月)

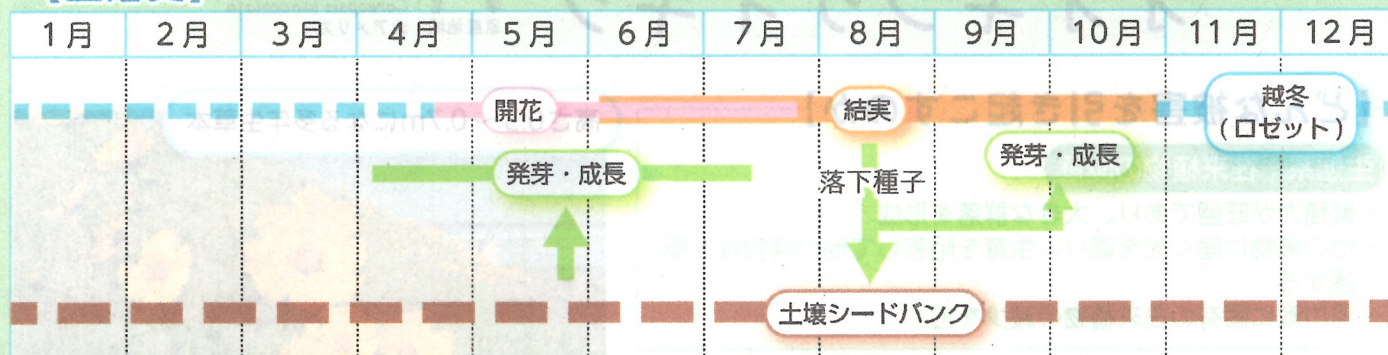


地上部がロゼット(丸く広がり地面にへばりつく)の状態で越冬する

【特性】

- ・種子は休眠性があり、土壤に埋まっても発芽能力を維持しており、土壤シードバンクを形成する
- ・海外での事例では、埋土種子の生存期間は2～13年との報告がある
- ・種子には翼があり、風や水、土壤の移動による散布が知られている
- ・刈り取り後、地下部が残ると速やかに再生し、翌年には開花する

【生活史】



【防除方法】

作戦を立てる！

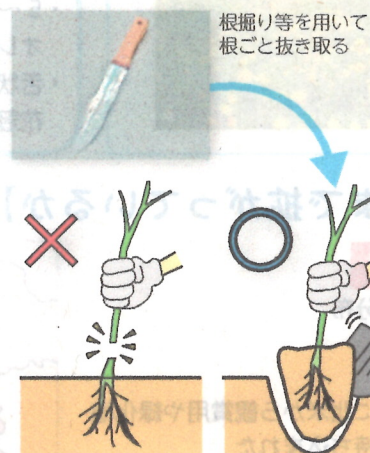
根茎からでも増えるオオキンケイギクは、根を残さないこと、種子を作らせないことが重要です。現場の状況、作業人数、使用できる道具によって、選択できる防除方法は異なります。どのような防除に取り組むか、まずは作戦を立てましょう。

作業を見直す！

防除効果を実感できないときこそ、作業の見直しが重要です。記録した実施内容や経過の観察から減らない要因を考え、道具を使う、作業回数を増やすなど、作業を効果的にする方策を探りましょう。

抜き取り 根絶を目指す

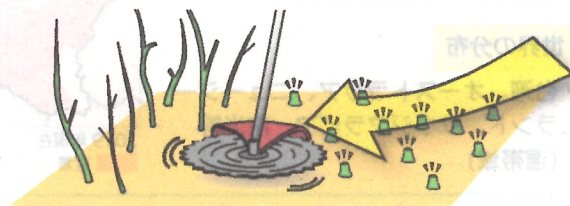
- 種子のほか根茎でも拡がり、根茎の一部分でも残っていればそこから再生するため、根ごとしっかりと抜き取る
- スコップや根掘り等を用いて根ごと抜き取る（できるだけ根を残さないように！）
- 年1回以上（種子を散布する結実期が始まる前の5月頃まで）、継続して実施する
 - ※抜き取った株に花や果実が付いている場合は飛び散らないよう、袋に入れる等の配慮が必要
 - ※土壌中には大量の種子が存在し、さらに種子の休眠期間が長い可能性がある
 - ※周囲から種子が供給される可能性もあり、毎年継続して作業することが必要



刈り払い 抑える

広範囲を防除したい場合に適している

- 刈払機等による刈り払いは抜き取りに比べると作業は軽微であり、種子をつける前に実施すれば、種子による繁殖を抑える効果がある（ただし、残った地下茎から再生するため、継続した実施が必要）
- 年に3回以上（種子を散布する結実期が始まる前の5月頃まで）、継続して実施する
 - ※1回の刈り取り程度では、切株からたくさんの茎が発生し再び花をつけるため、継続した実施が必要



きっちりと処分する ～作業後～

- 抜き取ったまたは刈り払ったオオキンケイギクは、密閉できるごみ袋等に入れて枯らす
- それぞれの自治体のゴミ処理方法に従って焼却処分する
 - ※特定外来生物に指定されたものは、原則として「飼育、栽培、保管及び運搬すること」、「輸入すること」、「野外へ放つ、植えるまたはまくこと」、「譲渡、引き渡し、販売すること」が禁止されている
 - ※なお、以下のすべてに該当する場合は、運搬・保管が可能
 - ・防除した特定外来生物である植物を処分することを目的として、ごみの焼却施設等に運搬するもの
 - ・落下や種子の飛散等の逸出防止措置が運搬中にとられているもの
 - ・特定外来生物の防除である旨、実施する主体、実施する日及び場所等を事前に告知する等、公表された活動に伴って運搬するもの
 - ・保管中の逸出防止措置がとられており、第三者が容易に持ち出すことができないよう実施する主体において管理され、かつ必要最低限の期間に限り行う場合



拡げない ～新たに植えない・残さない～

- オオキンケイギクは黄色で目立つ花をつける
- 花がきれいだからといって、野外に生育する株や種子を持ち帰って自宅に植えることは絶対にしない
- 清掃活動等で草刈りを行う際には、残さずにしっかりと刈り取る